要　旨

別府大学とモンペリエ第三大学との学術交流

利　光　正　文

1　学術交流の概要

昨年３月、１ヶ月間南フランスのモンペリエに滞在し、モンペリエ第三大学にて講義を行った。1999年､別府大学とモンペリエ第三大学との間で学術交流協定が締結された。更に2004年10月４日、両大学の間で交流協定延長の調印に基づく教員及び学生の交流に関する同意書が結ばれた。この調印に従い、井上 富江教授及びジョジアンヌ・マス教授の主導により、以下の交流を行うことに同意した。

（１）教員の交流　（２）学生の交流　（３）その他の交流

（１）については、既に両大学の教授が相手大学において講義を行っており、別府大学からはこれまで５人の教員がモンペリエ第三大学で講義をした。従って、私は６人目の教員となった。私が帰国した翌月（４月)、モンペリエ第三大学のバルトマン准教授（地理学）が別府大学を訪れ、約２週間滞在して講義を行った。（２）についても、両大学の学生が相手大学において原則１年間講義を受けている。昨年度はモンペリエ第三大学の学生が別府大学で受講し、１年間の期間を終え、７月に帰国した。（３）については、別府大学では2008年11月、別府大学創立100周年記念行事の一環としてシンポジウム「世界遺産とは何か」を行った。このシンポジウムには、発表者及びパネリストとして、中国、韓国の学者とともにモンペリエ第三大学の教授も招聘された。

2　モンペリエ大学

モンペリエ大学はフランスの大学としては屈指の歴史を誇り､医学部はヨーロッパ最古とされる。大学としての正式な創設は、ローマ教皇ニコラウス４世による大勅令が出た1289年のことである。これは､パリ大学（1150)､トゥールーズ大学（1229）に次いでフランスで３番目に古い設置と言える。モンペリエ第一大学は医学部、モンペリエ第二大学は理学部、そして、モンペリエ第三大学が人文科学系、芸術系である。モンペリエ第三大学の学生数は１万９千人であり、たくさんの外国人留学生が学んでいる。フランスでは90％以上が国立大学であり、モンペリエ第三大学も国立である。

ところで、モンペリエ第三大学は、別名をポール・ヴァレリー大学と呼ばれている。それは、この大学がフランス第三共和政（ブルジョワ共和政期、1870年９月～1940年）を代表する知性と称され、作家、詩人、小説家、評論家として多岐にわたる著作活動を行い、ノーベル文学賞候補にも何度もノミネートされたポール・ヴァレリーの出身校の故である。

彼は、1871年、モンペリエと隣接する港町セットに生まれ、モンペリエ大学法学部を卒業、パリ

で活躍後、1945年同地で死亡、遺体は出身地セットに葬られた。尚、作家の堀辰雄はその著『風立ちぬ』の中で、ポール・ヴァレリー『海部の墓地』の詩の一節「風立ちぬ、いざ生きめやも」という箇所を引用している。

3　モンペリエ

ラングドック・ルシヨン地域圏の首府であり、エロー県の県庁所在地でもあるモンペリエは、人口244,300人、地中海に面した南仏の学園都市として知られている。近隣のニーム、ナルボンヌ、ベジエなどがローマ時代から都市として成立していたのに対し、中世初期より都市として成立、学園都市として繁栄してきた。第二次世界大戦では、1944年５回にわたり、アメリカ軍の爆撃を受けた。モンペリエは､対独協力のファシスト的政権であるヴィシー政府の支配下にあったからである。地中海沿岸にあるので気候は温暖、過ごし易い土地である。ただ、３月は冷たい風がしょっちゅう吹き、コートなしでは戸外を歩けなかった。

4　講義概要

モンペリエ第三大学で行ったいくつかの講義の内、１つの講義について、その概要を述べたい。その講義のテーマは､｢インドネシアにおけるムスリム女性のイスラム改革組織アイシヤ（Aisyiyah）について」であった。以下、講義概要である。

インドネシアのイスラム改革団体ムハマディヤ（Muhammadiyahムハンマドに従う者）は、1912年11月18日中部ジャワの古都ジョクジャカルタにおいて、K.H.アフマド・ダフラン（K.H. Ahmad Dahlan）によって設立された。オランダ植民地政庁により、その活動は1919年までジョクジャカルタのみに限られていたが20年にはジャワ内で、21年にはオランダ領東インドでの活動を認められ、支部を拡大してゆく。ムハマディヤ設立の目的は、（１）ウンマ・イスラム（イスラム共同体）がコーランや預言者のスンナ（ムハンマドの言行）を手本としておらず、悪しきタクリド（慣行墨守）と旧式のドグマ、そして伝統を守る事のみに汲々としているので、コーランとスンナに基づかない行為からイスラムを浄化する。（２）イスラム教育機関は時代に取り残され、傑出したムスリムを生み出しえなくなっており、イスラムそのものが東インドのインテリ層にそっぽを向かれているので、従来のイスラム教育に加え西欧式近代教育を導入することにより近代的ムスリムの育成を行う。（３）ムスリムの福祉充実を図るため、孤児院、診療所、病院等を運営する。以上の３つであった。

ジャワ以外でのムハマディヤ支部の拡大は、ミナンカバウ（西スマトラ）のマニンジャウの1925年を皮切りに、翌年パダン・パンジャン支部、そしてシマブル（バトゥサンカル）支部と続き、ミナンカバウ全域へと広がって行く。更に、セレベス、ボルネオと拡大、やがて東インドの殆どの地域に支部が誕生する。ムハマディヤが浸透するのは、主として都市部であり、農村では

1926年にスラバヤ（東部ジャワ）で設立されたイスラム伝統的派の組織ナフダトゥル・ウラマ（ウラマの復興）が支持を広げる。ウラマとは、ムスリム知識人あるいはイスラム教師のことである。1923年のムハマディヤ支部数は15、会員数は2,622であったのが、1927年には支部数176、会員数は10,274に増加していた。尚、創立者のダフランは1923年に死亡し、第２代ムハマディヤ中央本部会長としてK.H.イブラヒムが就任していた（在任1923-1932年）。1929年ソロ（スラカルタ）で開かれた第18回ムハマディヤ大会において19の”地域会議（Komperensi Daerah）”が設置された。決められた。即ち、１．ジョクジャカルタ（中央本部）　２．ソロ　３．スマラン　４．マディウン　５．スラバヤ　６．パスルアン　７．ブスキ　８．マドゥラ　９．プカロンガン　10. バニュマス　11. プリアンガン　12. バタヴィア　13. ランプン・パレンバン（南スマトラ）　14. ベンクーレン（南スマトラ）　15. ミナンカバウ　16. 東海岸（東スマトラ）　17. アチェ（北スマトラ）　18. セレベス（スラウェシ）　19. 南ボルネオ（カリマンタン）であった。そして、翌1930年ブキティンギ（西スマトラ）で開かれた第19回ムハマディヤ大会において、この19の地域会議の議長として、それぞれコンスル（全権代理）を置いた。地域会議のコンスルは、地域の支部を統括する責任者であった。支部には支部委員長を初めとする13人の役員がおり、彼らはムハマディヤ会員の選挙により選出され、給与は支給されずにボランティアで任務についた。ムハマディヤの強みは、幹部を選挙で選ぶ民主的なシステムと強力な組織力にあった。このようにして、ムハマディヤは短期間の間に、オランダ領東インドのほぼ全域にその支部を拡大し、大きな組織へと発展した。尚、ムハマディヤは機関紙として、“Soeara Moehammadijah（ムハマディヤの声）”を1920年より今日まで発行している。

さて、ムハマディヤの創立者K.H.アフマド・ダフランは自宅の塾でイスラムを教えた６人の女子を核として、1914年に女性組織“サパトレスナ（Sapatresna）”を結成した。その組織を1918年“アイシヤ”と改称し、ムハマディヤ中央本部副会長ハジ・ムフタル（H.Muchtar）の指導に委ねた。アイシヤ役員は、以下の人物であった。

議　長　シティ・バリア（Siti Barijah）
書　記　シティ・バディラ（Siti Badilah）
会　計　シティ・アミナ・ハロウィ（Siti Aminah Harowi）
補　佐　ニャイ・ハジ・アブドゥルラ（Nj.H. Addullah）
〃　ニャイ・ファティマ・ワソール（Nj.Fatimah Wasool）
〃　シティ・ダララ・（Siti Dalalah）
〃　シティ・ワディア（Siti Wadi’ ah）
〃　シティ・ダウィマ（Siti Dawimah）
〃　ブシュロ（Busjro）

この役員の中で、シティ・バリア、シティ・バディラ、シティ・ダララ、シティ・ダウィマの４人は、アフマド・ダフラン塾の教え子であった。アイシヤの組織化にあたり、アフマド・ダフ

ランが目的として掲げたことは、以下の事柄であった。

（1） 誠意を持ってイスラムの女性として能力に見合った義務を果たし、賞賛を望むことなく、欠点のために一歩退くことなく。

（2） 慈善を行うためには知識をもたねばならないということを、十分に認識すること。

（3） 神に対し運命を委ねられた一つの義務を回避することなく、神による戒律にそむかない基礎を創造する。

（4） イスラム教の神聖さを守るための決心に全霊を傾ける。

（5） 仕事及び闘争に関し、友との友好関係を保持する。

ところで、創立者ダフランの死後、アイシヤの議長に就任したのは、ダフランの妻シティ・ワリダ（Siti Wallidah）であった。彼女はニャイ・ダフラン（ダフラン夫人）と通称され、夫の遺志を継ぎ、アイシヤの基礎を確立すべく奔走する。ムハマディヤの支部が設立された所にはアイシヤ支部も必ず設立され、両者は夫唱婦随の関係で組織を拡大する。やがて、アイシヤは独立の組織となるが、恐らくニャイ・ダフランの時代であろう。ムハマディヤが大会を開く時にアイシヤも同じく大会を開催し、お互いに協力しながら組織運営を行ってゆく。1927年、ムハマディヤの会員数が10,274名に対し、アイシヤのそれは3,012であった。ムハマディヤと同様、アイシヤも1926年機関紙“スアラ・アイシヤ（Soeara ’Aisjijah　アイシヤの声）を発行、ムスリム女性に対する啓蒙雑誌として重要な役割を果たし続ける。更に、アイシヤは教育活動にも熱心に取り組み、アイシヤ学校の設立に力を注ぐ。ムハマディヤ学校が普通科教育を中心に授業を行うのに対し、アイシヤ学校では裁縫とか料理等の実業教育に力を入れる。産婦人科医院の開設にも力を入れ、母体の保護と正しい育児法の普及にも尽力する。勿論、イスラムにかんする勉強会を催し、イスラムの正しい理解と近代的なムスリム女性の育成を目指した。ただし、アイシヤが理想とする女性像は、社会に出て男性と肩を並べながら仕事をバリバリこなすいわゆるキャリア・ウーマンではなく、経済観念に富み家庭で夫を支える妻、即ち良妻賢母型女性の育成を目標としている。ニャイ・ダフランは1930年までアイシヤ議長を務め、アイシヤの顔として活躍した。死後、彼女はインドネシアの国家英雄（Pahlawan Nasional）に列せられた。尚、夫ダフランも民族独立英雄（Pahlawan Kemerdekaan Nasional）として認定されている。

次に、アイシヤ運動の更なる発展について若干触れる。1930年ブキティンギ（西スマトラ）において第19回ムハマディヤ大会が開かれ、1932年にはマカッサル（南セレベス）において第21回大会が開催される。同時に、アイシヤも大会を開き、多くの人間が参加し、両大会とも成功裏に終わる。特に、ブキティンギでの大会はジャワ以外では初めてであったので、西スマトラ中から参集、延べにして１万５千人近くの男女が参加した。そして、これらの大会より少し前であるが、インドネシア（東インド）における女性運動も各組織の連帯を図ろうとする機運が盛り上がる。こうして誕生したのが“インドネシア女性会議（Kongres Perempuan Indonesia)”である。1928年12月22－25日、ジョクジャカルタにおいて初めての会議が開かれた。この会議に参加した

のは、以下に掲げる団体であった。

１．Wanita Utomo（美しい女性）　２．Wanita Taman Siswa（学童の園の女性）　３．Puteri Indonesia（インドネシアの女性）　４．Aisjijah（アイシヤ）　５．Jong Islamieten Bond bg. Wanita（青年イスラム同盟女性部）　６．Wanita Katholik（カトリック女性）　７．Jong Java bg. Wanita（青年ジャワ女性部）

この会議の目的は、①インドネシア女性の協会の間の緊密な関係が生まれるように。②女性の義務、需要そして発展の問題について協力して話し合いが出来るように。と言うものであった。そして、この会議の副議長としてアイシヤの若きリーダー、シティ・ムンジヤ（Siti Mundjijah）が選出された。更に、彼女は、その後アイシヤ議長（1930-36年）を務め、ニャイ・ダフランの後のアイシヤを担うこととなる。

最後に、1980年代アイシヤ議長を務め、ガジャ・マダ大学教授でもあったバロロ・バリード（Baroroh Baried）の論文（1986年刊）「インドネシア女性のイスラムと近代化」の中の言葉を引用し、本稿を終えたい。

> アイシヤは次の様に強調する。近代化のプロセスで、インドネシアのムスリム女性たちは社会の福祉と同様、家族の福祉にも責任を負わねばならない。このことの達成のためには、女性が女性の組織の中でともに働くことが必要とされる。宣教・教育・社会福祉・そして経済の分野でのアイシヤの活動は、インドネシアのムスリム女性がお互いの利益のために一緒に働くことが可能であるということを示唆する。この課題をやり遂げるため、彼らは時々家庭を離れ、社会奉仕に貢献せねばならない。アイシヤとは、インドネシアの女性の近代化に貢献する団体である。